

【第17回アジア新体操選手権大会 4日目】

大会最終日は個人および団体の種目別決勝が行われ、喜田選手はフープ・クラブ・リボン、鈴木選手はクラブ、シニア団体は2種目に出場した。

【個人：鈴木菜巴】

《クラブ》5位 得点：27.35 (DB 8.60/DA 3.50/A 7.50/E 7.80)

昨日の審判フィードバックを踏まえ、エカルテターンを別の難度へ修正して本番に臨んだ。本番では、修正後も次の要素へしっかりとつなげることができたが、足受けのRでは前方へ流れたため、無理に回転を行うことを回避。臨機応変な対応により、演技のスピードを損なうことなく継続した。ラストのRでも投げが大きくなり過ぎたが、最後まで集中力を切らさずやり切った。

本大会最後の種目ではあったが、鈴木選手にとっては、次に控える日本開催のアジア競技大会へ向けた「新たなスタート」としての意味合いも大きかったように感じられる。どのような状況でも「今できる最善を尽くす」という姿勢を最後まで貫き、日本代表としての責任と誇りを持って戦い抜いた演技であった。

【個人：喜田未来乃】

《フープ》8位 得点：27.35 (DB 8.60/DA 3.50/A 7.6/E 7.65)

昨年はフープ1種目のみの決勝進出であったが、今年は3種目で種目別闕所に進出。前日までに8演技を終えた中で、さらに3種目の決勝に出場することは初めての経験であった。

フープは予選・総合決勝を通して大きなミスなくまとめてきた種目であり、本日の決勝でも一つひとつをダイナミックに実施した。ラストの足投げRでは、手具が真上に上がったことで、前転シリーズの予定が2回転となった。予定通りの価値を実施できていれば、27点後半も十分に狙える内容であった。一方で、トップレベルで安定して戦うためには、落下ミスを回避するだけでなく、最後まで価値をこぼさず実施し切る力や、本番での身体・気持ちのコントロールがさらに求められる。

《クラブ》7位 得点：25.35 (DB 7.30/DA 3.30/A 7.50/E 7.25)

身体が動いている分、気持ちも前向きに入り、全体を通してエネルギーのある演技が見られた。一方で、「やり切りたい」という気持ちの強さが先行したことで、身体が上がった際のコントロールが難しくなり、判断ミスや細かな乱れにつながった。冒頭のRから投げにやや不安定さが見られ、終盤の滝上Rでも投げのコントロールが乱れ、落下につながった。

た。

《リボン》5位 得点：27.00 (DB 7.80/DA 4.20/A 7.55/E 7.45)

比較的丁寧にまとめることができた一方で、バランスの軸が不安定な場面もあり、身体難度では耐えながら実施している印象が見られた。美しく洗練された音楽に対し、喜田選手の動きからもその世界観は十分に伝わってくるが、身体難度へ入るまでのスピード感や軸の安定性に課題があり、全体としてややエネルギー不足を感じる部分もあった。身体難度やDAの描きにさらに力強さが加わることで、よりメリハリのある演技につながっていくと感じられた。一方で、フープ同様、予選から大きなミスなく演技をまとめ続けたことは評価できる。フープとリボンは昨年から継続している作品であり、踊り慣れていることで音楽との自然な流れや作品性がより表現されていた。

喜田選手は昨年に続き、日本代表としてアジア選手権に出場した。今大会では、経験を積んだことで代表選手としての落ち着きや強さも感じられた。今シーズンから新たなラファエリターンにも挑戦しているが、現時点では成功と失敗に波があり、安定性には課題が残る。一方で、この難度は現在多くの海外選手も取り入れている価値の高い身体難度であり、正確に実施できた際にはDB得点にも大きく反映される。喜田選手の持つ独自の世界観や作品性に加え、今後はより力強い実施力や、Dを確実に積み上げる安定感を身につけていくことが、さらなる得点向上への鍵となる。

大会4日目となり、トップ選手の中にはここまでに8演技を終え、さらに種目別決勝でも4種目を戦っている選手もいた。しかし、そのような状況でも疲労を感じさせることなく、決勝という特別な舞台の中でさらにエネルギーを高めた演技を披露していたことが印象的であった。そこには、国を背負って戦う選手・コーチたちの強い覚悟や執念も感じられた。日々の練習の中で、単に落下しないことだけではなく、動きのエネルギーやDを確実に取り切るための積み重ねが行われていることを実感した。D得点についても、グレーな実施は少なく、誰もが納得できる説得力のある実施力であった。種目にもよるが、トップ選手はD得点を12点後半～13点台で安定して実施しており、ジュニア選手においても、すでにシニアレベルに近い身体難度へ挑戦している選手が多く見られた。身体能力の高さだけでなく、育成段階からの積み上げの差も感じられ、日本としてもジュニア強化を含め、長期的な視点での見直しが必要であると感じた。

日本としては、今大会に向けて審判の先生方からご意見・ご指導をいただきながら、より確実に評価される実施方法や構成について試行錯誤を重ねてきた。しかし、その場で修正できる部分と、日々の積み重ねによってしか身につかない部分があることも改めて実感した。確実な実施力を高めていくためには、今後も継続的な積み上げが必要である。

ここからワールドカップ、世界選手権、そしてアジア競技大会へと国際大会が続いてい

く。今大会で得た課題や経験をしっかりと分析し、試合でしか得られない経験も糧としながら、日本チームとして一步步づつ着実に成長していきたい。

【団体：日本女子体育大学】

《ボール5》5位 得点：24.15 (DB 4.70/DA 5.60/A 6.85/E 7.00)

出場選手：山岸聖菜、常住加留奈、中村林伽、東愛梨、森下璃子

大会最終日となり、初日と比較すると緊張は和らいだ一方で、体力的な厳しさも見られた。練習では下半身の緩みや集中力を欠く場面もあったが、周囲のサポートや選手同士の声掛けによって気持ちを立て直し、チーム一丸となって本番に臨むことができた。心身ともに厳しい状況の中でも大きなミスなく踊り切ることができたが、交換の加点を全員で取り切ることができず、DB得点を伸ばし切れなかった。今後は、単にミスなく演技を行うことに留まらず、「ここで決める」という場面で加点要素まで確実に実施し切れるよう、演技全体の完成度をさらに高めていく必要がある。

《フープ3・クラブ2》3位 得点：24.20 (DB 4.70/DA 6.50/A 6.60/E 6.40)

出場選手：山岸聖菜、常住加留奈、中村林伽、東愛梨、熊坂華

今大会6回目の演技ということもあり、スタートから落ち着いて演技に入ることができた。ダイブロールのCRでは、背中で打ち返したフープの勢いが弱く、1箇所落下につながったものの、それ以外では昨日まで実施できていなかった加点要素を実施することができ、大きな移動もなくエネルギーに踊り切ることができた。持ち点や身体能力の面では上位国との差も見られたが、最終種目まで集中力を切らさず、自分たちのベストを尽くしたことに加え、上位国のミスも重なり、銅メダルを獲得することができた。

本番で得られた課題だけでなく、大会期間中に各国代表チームとともに練習する中で、選手たちは日頃の練習への向き合い方や意識の差も実感した。現地で感じたことを一過性の経験で終わらせるのではなく、日本に戻ってからの練習や今後の強化につなげていってほしいと願う。

貴重な経験の機会をいただけたことへの感謝を忘れず、今後控える国内大会や国際大会に向けて、さらなる高みを目指して精進していきたい。